

地方創生に係る交付金 実績報告書

地方創生加速化交付金事業①

資料 2

事業名称	巨大アートを活用した観光戦略推進事業		事業年度	平成28年度 (平成27年度繰越)
総事業費	21,477,890	うち国庫補助金額	21,447,890	補助率 10/10

事業の背景・概要	<p>本市は、農業生産が盛んな土地柄であるとともに、古代蓮の里や忍城址、中心市街地に点在する足袋蔵など、多彩な観光資源が存在している。平成27年度に実施した田んぼアートは、世界最大の田んぼアート(Largest rice field)として、ギネス世界記録に認定された。また、田んぼアートで排出された稲藁を廃棄することなく、再利用して日本最大級の「巨大なわらアート」の制作にも取り組んでおり、農業という題材を用いて行田をPRし、観光誘客の推進を図っている。</p> <p>一方、これら集客性の高い巨大アート事業が、中心市街地から離れた郊外で開催されているため、市街地まで回遊する観光客が少なく、市全体の地域の活性化に結びついていない状況にある。このことから、巨大アートの観光客を市街地へ誘導するため、GPS機能を備えた行田観光周遊アプリを作成し、きめ細かな観光案内の充実を図った。</p> <p>また、2019年のラグビーワールドカップや2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催を見据えて、日本固有の稲作文化を活用した巨大アートの制作に外国人に参加してもらうモニターツアーを実施するとともに、外国人旅行者に向けた情報発信を行うことにより、インバウンド観光の推進を図った。</p>
----------	--

取組名	実施内容	効果・今後の展望	交付決定額	総事業費
世界最大の田んぼアート事業	緑豊かな水田に色彩が異なる稲を植えつけ、文字や絵柄を表現し、付加価値のある農業体験の提供と観光PRを図るもので、平成28年度は、世界一長く続いているRPGとして、同じギネス認定を受けた人気ゲームシリーズ『ドラゴンクエスト』とのコラボレーションにより実施した。	「ドラゴンクエスト」とのコラボレーションも効果もあり、更なる注目を集め、期間中の古代蓮会館入場者数は前年比約4%増を記録した。 10周年を迎える今年の田んぼアートは、会場を新設し、2会場それぞれに異なる絵柄を描き、その合計面積は過去最大の面積となる他、絵柄に陰影を取り入れるなど、ギネス認定に満足することなく、今後も進化し続けていく。	10,000,000	10,069,000
巨大なわらアート制作事業	冬季における新たな観光資源の創出と観光客の増加を図るため、田んぼアート事業から排出される稲わらを再利用し、巨大な「わらアート」を作成するもので、平成28年度は、田んぼアート同様、人気ゲームシリーズ『ドラゴンクエスト』とコラボレーションし、スライム3体、キングスライム1体を制作した。	平成28年11月27日(日)にわらアートが完成し、平成29年3月26日(日)まで古代蓮の里にて展示し、展示期間中は家族連れなど大勢の来園者でにぎわった。 今後においても冬期の観光誘客推進を図るため、同様に事業を推進していく予定である。	7,000,000	6,775,402
外国人モニターツアー	2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会等の開催を見据え、行田市へ外国人観光客を誘致するため、外国人の視点による行田の魅力発見と、外国人に向けた効果的な情報発信方法の構築を目的に、訪日外国人を対象とした全4回のモニターツアーを実施した。	田植え体験やボタリングなど計4回のモニターツアーを実施し、外国人の視点による本市の魅力や課題を調査し、今後のインバウンド施策の基盤となる「インバウンド観光の環境整備に向けた報告書」を作成した。 今後は、上記報告書を基にインバウンド施策を推進していく。	1,000,000	999,528
外国人向け情報発信事業	「インバウンド観光の環境整備に向けた報告書」に基づき、本市の観光資源や観光レンタサイクルを紹介するPRマンガを作成し、既存の外国人向けマンガアプリで、平成29年3月に配信を開始した。	平成29年度においても5月と6月に、本市の魅力をマンガアプリにて配信しており、今後はホームページやSNSを通じて閲覧者数の増加を図っていく。	800,000	795,960
観光周遊アプリ開発事業	田んぼアートやわらアート等をきっかけとして本市を訪れた観光客が、市内各地に点在する他の地域資源を快適かつ効率的に回遊できるよう観光周遊アプリ「たびなび行田」を新規に開発し、平成29年3月に一般向けに配信を開始した。	平成29年6月末現在429のダウンロードがあった。 平成29年度においても、日本遺産認定に伴う観光モデルコースの掲載や、登録情報の見直し、新着情報の積極的な更新をすることで、アプリユーザーの満足度の向上を図るとともに、市のSNS、ホームページ等を活用し、更なるダウンロード数の増加を図る。	3,000,000	2,808,000
合計			21,800,000	21,447,890

重要業績評価指標 (KPI)

指標の名称	分類	事業実施前(平成27年3月)	事業終了時(平成29年3月)
観光入込客数	目標値	—	1,600,000人
	実績値	1,466,000人	1,503,000人

地方創生加速化交付金事業②

事業名称	行田在来青大豆粉プロジェクト		事業年度	平成28年度 (平成27年度繰越)
総事業費	6,378,710	うち国庫補助金額	6,378,710	補助率 10/10

事業の背景・概要	<p>近年、栽培が復活した行田在来青大豆は、豆の色や香りが良く、濃厚で甘みが豊かなことから、本市においてブランド化が推進されている。</p> <p>今般、県内企業の協力により、「行田在来青大豆」の「無菌大豆粉」や「全粒大豆乳酸発酵液」が開発され、①大豆粉、②豆乳(大豆粉に水を加える)、③大豆ヨーグルト(豆乳に乳酸菌を加える)、④大豆乳酸発酵濃縮液(大豆ヨーグルトを液体加工する)と様々な大豆粉の形態が可能となったことから、「行田在来青大豆」商品開発・販売促進協議会が、食品製造業者と連携・協力して、青大豆粉等を活用した機能的な試作品の開発を行うとともに、大学等の研究機関に依頼して、青大豆粉の機能性や成分、摂取効果等について、分析を実施する。また、開発した試作品については、保育園や学校給食、介護施設等において、様々な世代の方に摂取してもらい、モニタリング調査を実施することで、乳幼児食や介護食、健康食としての可能性や需要等について、調査・研究を行う。</p> <p>併せて、「行田在来青大豆」のPRパンフレットを作成し、各種イベントやモニタリング調査などで配布することにより、「行田在来青大豆」の認知度の向上とイメージアップを図る。</p> <p>今回の取組みを足掛りとして、行田在来青大豆粉を活用した付加価値の高い商品開発を食品や医薬品など様々な分野で行い、本協議会等が販売するとともに、大量生産が可能な企業へ商品化を働きかけることで、青大豆粉商品の販路拡大とその原料となる青大豆の生産拡大を図る。</p> <p>また、市内に青大豆の加工所の誘致を推進することにより、新規雇用の創出を図るとともに、現在、整備に向けて取り組んでいる産業交流拠点(道の駅)の施設機能の一部として、青大豆の研究所や体験施設の設置を目指し、併せて、米麦中心の本市農業について、耕作放棄地の解消に向けた大豆への転作を奨励促進し、農業生産を拡大することにより、大豆によるまちづくりを推進し、地域農業の成長産業化と地域の稼ぐ力の向上を図る。</p>
----------	--

取組名	実施内容	効果・今後の展望	交付決定額	総事業費
行田在来青大豆粉プロジェクト	<p>「行田在来青大豆」商品開発・販売促進協議会に対して補助を行い、会員を中心に15品の試作品を開発し、うち7品を商品化した。また、試作品のうち、6品について成分分析を大学等に依頼して実施し考察を取りまとめた。その他、普及に向けて、小中学校の学校給食やぎょうだ「夢」まつり等各種イベントでのモニタリング調査や、PRパンフレット作製等を実施した。</p>	<p>「行田在来青大豆」は平成19年度より市内で大規模栽培が復活し、作付面積の拡大に取り組んでいるが、本事業により、小麦の代替としての活用が見込める「大豆粉」による新たな活用方法の発掘とともに、「まめれ〜ぬ」大豆粉パウンド「ケーキ」など低糖質、高たんぱく質のお菓子や肉を一切使わず75%が大豆でできている「豆吉コロッケ」などが商品化され、青大豆の需要の拡大が見込めた。</p> <p>今後は青大豆粉の有用性を模索し、青大豆粉を活用することによる付加価値のPRを進めていくとともに、引き続き、大豆粉新商品の開発の支援を行っていく。</p>	10,000,000	6,378,710

重要業績評価指標 (KPI)

指標の名称	分類	事業実施前(平成28年3月)	事業終了時(平成29年3月)
試作品開発件数	目標値	—	5種類
	実績値	0種類	15種類
商品化件数	目標値	—	1種類
	実績値	0種類	7種類
モニタリング調査による試作品の満足度	目標値	—	80%
	実績値	0%	90%

地方創生推進交付金事業

事業名称	「足袋のまち行田」活性化プロジェクト		事業年度	平成28年度～平成30年度	
総事業費(※)	45,600,000	うち国庫補助金額	22,800,000	補助率	1/2

事業の背景・概要	<p>行田の足袋は、明治時代には名実ともに日本一となり、昭和13年には、事業所数約200社、足袋生産量8,400万足、全国生産の80%を占めていた。しかし、戦後の服装の変化は著しく、靴下やサンダルなどに移行していくに従い、生産は伸び悩み、現在は、全国トップシェアを誇ってはいるものの、近年は年間250万足から300万足の生産量にとどまっている。</p> <p>そのような中、平成27年3月2日に行田の足袋製造用具などが国登録有形民俗文化財に登録されたほか、本年7月8日に行田の足袋産業が舞台となった池井戸潤氏著書「陸王」の出版など、本市の地場産業の足袋が再び注目を浴びたことから、ここを絶好の機会と捉え、「既存足袋の販路拡大と新商品開発」と「足袋のまち活性化」を一体的なプロジェクトとして実施することで、事業所の減少及び地場産業の衰退に歯止めを掛けるとともに、市経済及びまちの活性化を図る。</p>
----------	---

実績

年度	実施内容	事業費	交付金充当額
H28年度	交付決定が平成28年12月末であったため、事業期間は平成29年1月～3月の3カ月 ○販路拡大・新商品開発事業 販路拡大のため、イベントPR用品の作成やマーケティング調査などを行うとともに、新商品開発のための金型作成や試作を行った。	3,753,642	1,876,821
合 計		3,753,642	1,876,821

予定

年度	実施内容	事業費	交付金充当額
H29年度	○販路拡大・新商品開発事業 販路拡大のため、積極的な商談会・展示会への参加や、新商品開発のための金型作成や試作、それに必要なミシン・刺繍機の購入を行う。 ○足袋のまち活性化事業 足袋PR動画の作成、「足袋と足の形成」研究委託(2カ年事業)、足袋コレ、足袋蔵めぐり、足袋の日アプリの作成、足袋フィッター養成講座、秩父鉄道記念入場券の発行などを行う。	19,600,000	9,800,000
H30年度	○販路拡大・新商品開発事業 販路拡大のため、積極的な商談会・展示会への参加や、新商品の展示会用の試作や自動裁断機の導入を行う。 ○足袋のまち活性化事業 「足袋と足の形成」研究委託(2カ年事業)、足袋コレ、足袋蔵めぐり、足袋フィッター養成及び活用やその他各種イベントを行う。	21,000,000	10,500,000
合 計		40,600,000	20,300,000

重要業績評価指標 (KPI)

指標の名称	分類	事業実施前(平成27年3月)	1年目(平成29年3月)	2年目(平成30年3月)	3年目(平成31年3月)
「足袋のまち行田」活性化推進協議会加盟事業者の足袋売上高合計	目標値	-	910,000千円	940,000千円	990,000千円
	実績値	900,000千円	931,241千円		
観光入込客数	目標値	-	1,466,000人	1,516,000人	1,566,000人
	実績値	1,466,000人	1,503,000人		